橋本伸也著
『帝国・身分・学校
――帝制期ロシアにおける教育の社会文化史』

上垣　豊

本書は、比較社会教育社会史研究会を主宰し、比較史的な観点に立った学際的な共同研究を進めている橋本伸也氏の、『エカテリーナの夢　ソフィアの旅』（ミネルヴァ書房）に続く、二冊目の単著である。望田幸男氏らによって一九八〇年代に始められたヨーロッパの中等教育国際比較史研究に当初から関わった著者が、国家と教会のヘゲモニー争いや文化統合を重視する社会史研究にも目を配り、教育哲学や教育理論の歴史にたいする学識を活かしながら、独自の境地を開いていった成果である。前著が女子教育というテーマで問題を絞って論じていたのに対して、本書では、近世・近代のロシア国家とロシア帝国の歴史を教育社会史という視角から総体として捉えなおそうとした試みであり、注もあわせれば五百ページを越える大著となっている。

描き出された世界は、時間軸でいえば、一六世紀から二〇世紀初頭のロシア革命までの数百年にわたり、領域的にもロシア帝国の最大版図、すなわち現在のポーランド、沿バルト地域、ウクライナから、中央アジアのイスラーム圏、さらには極東までおよんでおり、取り上げられた民族も、バルト・ドイツ人、ウクライナ人、ポーランド人、朝鮮人まで多様で、宗教もキリスト教、ユダヤ教のみならずイスラームも取り扱われている。読者はロシア史というよりも世界史のパノラマを見るような思いにとらわれることだろう。

評者は近代フランス史を専攻しており、ロシア史についてはまったくの門外漢である。また、ロシアの教育はドイツの影響を強く受けているが、フランスからの影響は少なく、本書でもフランスへの直接的な言及は少ない。そのため、書評の筆をとったものの、何を書くべきか迷ったのが正直なところである。そこで、多少雑駁になるが、評者の関心に沿って内容の紹介を行った後、一人のフランス近代史を専攻する者に何が印象に残ったかを述べることで書評の責めを果たすことにしたい。

「序　帝制期ロシアにおける教育の社会文化史――課題・対象・方法」では、最初に、近年の社会史・文化史研究の興隆が与えた教育史分野へのインパクトが的確に指摘されている。社会史・文化史によって「国民国家のアイデンティティ・ポリティックスとしての教育や学校への関心が、歴史研究上の主題として」せり上がり、「構造史的あるいは機能論的な教育文化史という新たな潮流を生み出し」、それは「歴史学とは比較的疎遠なままにある種の「官房学」として制度化された伝統的教育史学の視野や限界をはるかに超え出て」いた。こうした先行研究の批判的摂取のもとに、本書では「教育社会史上の問題関心に触発されながら、一七世紀から二〇世紀のロシア帝国の構造を解明すること」が課題とされている。

その際に、ロシアの近代化のプロセスを、後発国による先進モ

デルの模倣として描くだけでは十分ではなく、「一体化しつつある世界のシステム化ないし構造化の重要な一局面としても把握」することを提起している。第二に、ブルデューの文化的再生産論は、「当該社会の階層構造の組織化のされ方の本質的差異に配慮したときにはじめて、ロシアでも適用可能である」とし、ロシアの場合、「教育の身分制原理」と称される、身分制と学校教育とが制度的にも集合意識的にも結合させられた形態に配慮しなければならないとしている。第三に、多民族国家である帝国の構造の維持と国民国家形成の課題との矛盾を挙げ、その矛盾は、「学校教育における教授言語のロシア語化がもたらした軋轢」のなかに尖鋭な形で表れることになった、と見通しを述べている。これら三つの仮説が三つの部のそれぞれの検討課題となっている。扱われているテーマは身分制、近代化、知識社会の形成から国民国家、帝国と少数民族問題、中・東欧地域圏など、西洋近世・近現代史研究の主要課題のほとんどではないかと思われるほど広汎である。

第Ⅰ部　「ロシアとヨーロッパ――知識社会からのアプローチ」では、「ロシアにおける西欧的学知の受容の特質を知識社会史的方法で解明し、総体としての学知の受容のもたらす社会的意味を問う」ことが課題とされ、教育機関、それらに関与する人々の集団やネットワークに軸足をおいて分析し、「西欧の学知の展開とそれにまつわる諸関連がロシアを必要としたという、双方向的な関係性のもとで理解」しようとしている。「第1章　ロシアの近代化と西欧的知の移入・受容」は第Ⅰ部のみならず、全体の「見取り図」となっており、ロシアだけでなく、「ヨーロッパの経験した知の変動」が概説的に論じられ、「ロシアとヨーロッパとの学術・教育分野の相互浸透的な関係史」がたどられている。本書のなかでもとくに著者の科学史・大学史に関する深い学識がうかがわれる部分である。その後、本書で取り上げられる一連のテーマが提示され、ロシアとヨーロッパの関係での双方向性を指摘し、「ロシアは中世・近世以来ヨーロッパに組み込まれていた地域を内部化し、それらを媒介者としてみずからの西欧化を進めた」としめくくっている。

「第2章　東スラヴの正教世界と「ラテン文化」受容の問題」では、一七世紀にロシアが「ラテン文化」に遭遇する際、「媒介者としての役割を果たした」「ウクライナ人文主義者たち」にまず注目する。モスクワの国家と教会も、古儀式派への対抗と紀律国家化する近世国家としての体裁を整えるのに必要な人員確保のために、西欧型学校を受け入れる必要があった。ただし、ラテン文化が「エリートの地位を正統化する教養=文化資本として機能するほどに深く定着」したとは言えず、それは「ロシアにおける近代市民社会形成の弱さに通底」していた。ロシアの西欧化は、同時にヨーロッパ自身がロシアとの相互浸透するなかで再定義されていくプロセスでもあった（八二頁）。「第3章　ライプニッツとロシア」では、ロシアの西欧化をヨーロッパの側から促した代表例として「初の学術情報発信源たるサンクト・ペテルブルク科学アカデミー」を提案したライプニッツが取り上げられている。こうして、ピョートル改革を契機として西欧型科学移入が本格化することになる。「第4章　帝制期ロシアの「御雇外国人」教師」では、一八世紀啓蒙期から一九世紀前半までの百余年の間に招聘された、ドイツ人を中心とした外国人学者の相貌と役割が描き出

されている。一九世紀第二四半世紀になってようやく本格化する「学問のロシア化」は、バルト・ドイツ人や御雇外国人の子孫などロシアに定住している者も含め、様々なタイプのドイツ人集団の貢献抜きには語れないのである。ドイツの支配的地位を強調する通説は、ドイツ人と称される人々の多様なあり方を明らかにすることによって、相対化されている。

評者には、ヨーロッパとロシアの関係を双方向でとらえ、両者が相互に浸透して、それぞれ変化していくという視点が新鮮であった。今日、EU東方拡大を契機にヨーロッパ・アイデンティティが問われているが、著者の言うとおり、そもそも歴史的に見ても、たえず変転していたものなのである。また、フランスの存在はイエズス会やフランス語を愛好した貴族社会を通して見え隠れするが、一八世紀にはすでに、ロシアの西欧化への影響ではドイツがフランスを凌駕しており、その際に、学術や高等教育がドイツの切り札になっていることが、「知識基盤社会」と言われている今日の世界と比しても、意味深長に思われた。

第Ⅱ部　「第5章　ロシアの身分制と「教育の身分制原理」」ではロシアの身分制の特質を「教育の身分制原理」という概念で説明しようと試みられている。近世におけるロシアの身分制は西欧に比べ、未成熟であり、むしろ職業・身分ごとに普及した学校教育が「カースト化」を進める役割を果たした。これは、ヴラジミルスキー=ブダーノフにならって「教育の身分制原理」と呼ばれている。この原理にかかわる学説史を整理した後、著者は、「教育の身分制原理」の再定義を試み、「教育機会の制限や排除を介して身分的固定性を基礎づける一方、機会開放と教育資格取得による身分間移動を促進するという両義性を有した」（一二六頁）としている。第6章では、「貴族の特権的教育機関の成立と拡大」が扱われている。一八世紀に始まり、一九世紀に拡大する身分的に特権的な教育機関は、軍事と官僚制にとっての実用的機能と合わせて、文化的存在としての貴族にとっての象徴的意義を有した。貴族の特権的教育機関は国民教育省管下ではなく、いずれも陸軍省などの諸官庁の管轄下におかれた。「第7章　国民教育省管下教育機関における身分制問題」では、大学・ギムナジアなどにおける身分制問題について、一九世紀前半に主眼をおきながら論じられている。大学は、貴族優先政策が一定効果を挙げたものの、貴族と他身分出身者がともに学び、異なる多様な文化が併存することになった。ギムナジアは古典系と実学系課程に複線化がはかられ、貴族・官吏身分出身者の占める割合は大学に比してかなり高いものの、他身分にも開かれていた。中等・高等教育機関は、「身分的な再生産を通じて身分間の差異化をはかりながら」、同時に「社会移動を正統化する」も機能はたしていたのである。

「第8章　エリート形成の転換と学校――一九世紀後半――二〇世紀初頭」は一九世紀後半以降に進展した中等・高等教育システムの構造転換を、「大改革」期以降の社会変動との関連で明らかにすることを目的としている。中等教育が経験した制度変更は、同時代の西欧諸国が経験したものと共通していた。他方、高等教育では、大学以上に官立私立の多種の高等専門学校が大きく発展し、身分制的秩序が完全に解体したわけではなかったが、階級社会・専門職社会への移行の兆しもうかがわれるようになった。第

9章は「一九世紀のエリート中等教育における古典語教育問題」がテーマである。一八三三年に国民教育相となったウヴァーロフのもとで、古典陶冶を中軸に据えた中等教育がロシア教育史上はじめて確固たる地位を得ることになった。ウヴァーロフは、古典陶冶によって「教養階級としての貴族身分の創出」（二二九頁）をはかろうとしていた。その後一八四八年革命の後で、いったん古典語教育は後退したが、一八六四年ギムナジア令改正によって古典語教育は再び強化された。これは知識と教養による「貴族」の創出というメリトクラシー的社会階層秩序への移行を展望したものであった。だが、その後世紀末の改革で古典語の比重はしだいに後退していった。

第10章では、ロシア正教会聖職者身分の学校が扱われている。ロシアの正教会は、「教育の身分制原理」を実体化するいち早い事例であり、一八世紀には、身分的閉鎖性を格段に強めて「カースト」に擬せられるほどになった。一九世紀中葉、とりわけ「大改革」期以降、教区司祭位の世襲制を解体し、聖職者を開かれた社会階級に改造する一連の措置が法制化され、身分制的社会編成は激しい矛盾を経験する。神学校はギムナジアと並ぶ大学への人的供給源となったが、良質な司祭候補者の安定供給には失敗し、その後「反改革」によって逆流が生じた。世紀転換期には各地の神学校で学校紛争が頻発したが、結局、帝政政府は、抜本的改革を提起することはできなかった。

第Ⅱ部を読んで考えさせられたのはロシア正教とカトリック教会の学問的な伝統の差であり、教会の学問的伝統について比較史的な検討する必要を感じた。フランスでも一八四八年革命の直後、カトリック教会のなかに自由主義への嫌悪から古典人文学、正確に言えば異教時代の古典を排除しようとする動きがでてくる。だが、その流れは異教時代の古典がもつ教育的価値を高く評価するイエズス会などの存在によって未然に防止されたのである。また近代市民社会形成におけるラテン文化の役割を肯定的に評価している点が大変興味深かった。というのは、フランスでは、ナポレオンや七月王政の政治家ギゾーの政策に認められるように、革命後の混乱状況のなかから新しい統治階級を創出し、鍛え直すために、「百科全書的」教育から古典人文学教育重視へとエリート教育が回帰するからである。

他方、中等・高等教育のエリート養成機関が細分化され、しかも身分的に分断されているロシアで、はたして、官僚団の一体性や統治エリートとしてのまとまりは確保されたのか疑問に思った。フランスではナポレオンによる改革の後、中等教育段階までのエリート教育では国立中等学校の育成・強化と、私学への規制、バカロレアなどを通じて教育内容の統一につとめ、エリート集団の一体性の確保に腐心していたが、それにくらべて、ロシアの事情は相当異なっているように思われた。関連して、八章で、「新たな分野の専門職者を含み込んだ「新しいエリート集団」」が形成されたとしているが、このような状況のなかで「集団」と呼ぶにふさわしい一体性や自己意識は存在していたのであろうか。それともナロードニキ主義やマルクス主義が、細分化されたエリート養成機関に代わって、エリートあるいは対抗エリート集団形成に大きな役割を果たしたということなのであろうか。

「第Ⅲ部　教育システムの帝国的再編と民族問題」、「第11章帝

国とネイションと学校」では、西部諸県・沿バルト諸県と東部・南部のイスラーム圏のムスリム住民にたいする「ロシア化」政策が検討されている。地域における諸民族の複雑な関係を反映して、それぞれの民族運動への帝国政府の対応は異なり、「ロシア化」政策についても地域的、民族的に差異化された諸システムが併存していた。たとえば、西部諸県では統治エリートとして君臨したポーランド人と従属的立場にあったウクライナ人、ベラルーシ人などとの対立が、東部・南部ではイスラーム内の改革派と保守派との対立が絡んで、「ロシア化」政策は複雑に展開した。いずれの地域でも「ロシア化」は所期の目的を達成せず、かえって民族性の覚醒と諸民族集団のネイションとしての自立化が助長され、「帝国的秩序衰退」にみちびく誘因となったとされる。

「第12章ウヴァーロフ教育大臣期の西部諸県教育政策と「ポーランド問題」」では、ポーランド地域で形成された教育的伝統が、併合以後、帝国の政策とシステムに取り込まれてどのような展開を遂げたかが検討されている。ロシアにおける「ポーランド学校システム」の終焉の後、国民教育相に就任したウヴァーロフは、文化と教育を通じて諸民族の自発的同化を求めた。だが、こうした穏健なアプローチもポーランド貴族から拒否された。他方、表面的には帝国の方針に従っていたかに見えた学校も、実際にはむしろポーランド精神、ウクライナ文化の涵養に寄与していた。続いて、第13章では、スウェーデン領時代に高い識字率を誇っていた沿バルト諸国を扱っている。この地域は、ロシア領に編入されてから、いったん識字能力が落ち込むが、ドイツ人貴族の影響力をそぐ目的もあって、帝国政府は学校普及を進めていく。世紀中葉に皇帝に期待を寄せるエストニア人・ラトヴィア人の大規模な正教改宗が生じ、これを受けて帝政政府は彼らのためにロシア語を教授する正教民衆学校を設立していった。だが、当初は帝国に期待を寄せていた民族運動も世紀末にロシア化政策が実施されると、帝国に幻滅するようになった。第14章では「対ユダヤ教育政策の展開とユダヤ人の教育経験」が検討される。ユダヤ人が近代主義者と伝統主義者とに分裂し、帝国による統合政策は近代主義者との合作の面があった。ところが、他の民族集団にたいする「ロシア化」政策が強行された時期に、「ユダヤ人割当制という反ユダヤ主義的な排除政策が採用」されることになった。それでも統合政策は、専門職や学問の世界に活躍する人材や、カウンター・エリートを生み出し、政府の意図を超えた成功を収めることになった。

第Ⅲ部は補論②でロシア極東の朝鮮人も扱っており、本書のなかでも世界史的なスケールの広がりをもっとも感じさせる部分である。様々な読み方が可能であろうが、評者が一番感銘を受けたのは、民衆教育にたいする視角と言語政策の比較史的考察である。近代化から取り残された、あるいはそれに反発する民衆の側の動きがあまりよく見えてこない憾みがあるが、それはロシア帝国史研究全体が抱える課題なのであろう。

最後に本書全体をとおして感じたことや考えさせられた点を述べておこう。著者は学校教育の啓蒙的役割、あるいは近代市民社会を形成する役割については、文化的再生産論を承認しながらも、大局的には肯定的な立場をとっているようである。「近代的知識の魅力は岩盤の隙間にしみこむ雨水の如く、伝統主義の支配する

空間にもじわじわと浸透した」（四一一頁）という文言に、著者の教育に対する期待あるいは希望を読み取るのはそう難しいことではない。こうした変化が表れるにはかなりの時間が必要となるが、そのためにもロング・デュレで分析する必要が生じたのではないかと推察される。

評者はこうした立場に全体として共感するものであるが、ポストモダン派からは「近代的知識」あるいは「西欧的知」にたいしてあまりに楽観的ではないかという批判が予想される。その批判はおくとしても、「近代的知識」などと呼ばれるものの内実は、別個に問題にされてよいだろう。関連して、本書では「古典的陶冶」「一般的陶冶」「実学」「専門的陶冶」といった教育学用語が手際よく整理されて使われているが、一点気になるところがあった。「一般的陶冶」の「一般」は「普通教育」と「教養教育」のどちらに関わるのであろうか。どちらに関わるかで、かなり含意が異なってくると思うのだが、著者の考えを聴きたいところである。

フランスとの比較では、教育改革や改革議論の同時性あるいは共通性が印象に残った。一九世紀の教育改革や改革議論では、ドイツの影響をより直接に受けたためか、実科ギムナジアの設置などロシアのほうがフランスより早く展開しているように思われた。工業技術系高等教育機関の「突出的成長」（二〇九頁）が見られたロシアは、ウルトラ・エリート養成のグランド・ゼコールを除いて工業技術系高等教育機関がほとんど存在していなかったフランスに比べ、かなり進んでいるようにさえ思われた。本書の直接の検討対象からはずれるが、こうしたロシアの「先進性」は、フランスにおける「知識人の誕生」（Christophe Charle）にも影響を与えたインテリゲンツィアの形成と、どのように関わるのであろうか。

他にフランスとの関連では、フランス語がロシア貴族の身分的アイデンティティーのひとつをなしていたという指摘が、外国文化の受容とフランス語教育を考える上で興味深かった。フランスのエリート教育における古典人文学教育の支配的地位は二〇世紀初頭まで続き、フランス語の地位は決して高くはなかった。アンドレ・シェルヴェルによると、アンシャン・レジーム期フランスでフランス語教育がほどこされていたのは、ラテン語が教授されることのない女子教育、貴族家族での家庭教師による教育ぐらいであった。フランス語の最初の文法書は一六世紀初頭に英語で書かれ、イギリス人がフランス語を学ぶために作成されたものであった。フランス貴族が洗練されたフランス語を巧みに操ることを重視し始めたのは、一七世紀前半以降にすぎず、外国の貴族と同じように、家庭教師をつけて子どもにフランス語を教えさせるようになった。こうして考えると、フランス語の国際語としての威信の高まりと、主に外国人を対象として発達したフランス語教授法が、国内での文化統合に役立ったとも言えるだろう。さらに一七五一年に貴族子弟のために創設された王立士官学校でフランス語教育が初めて重視され、こうした伝統はその後に創設され、貴族子弟が多く入学したサン-シール陸軍学校や海軍士官学校などに受け継がれた。そして、フランス革命後、貴族はフランス語を巧みに操ることに、文化的アイデンティティーを求めていくとされている。こうした変化と比較検討すれば、同時代に進むロシア

の「貴族身分の心性の成熟」（一六三頁）も違った見方ができるのではないか。

ブルデュー、フーコー、アリエスらの研究は、フランスでは Dominique Julia、Marie-Madeleine Compère、Roger Chartier らによる新しい教育史の試みに有利な状況を作り出すと同時に、学校に対し敵対的な風土を生み出した。だが、Julia、Compère、Willem Frijhoff は、一六世紀から一八世紀にかけてフランスに設立されたコレージュの比較研究を通じて、学校をなにかと批判したがる同時代の風潮から抜け出すことができた。[①] 同じようにブルデューらに影響を受けた著者が、本書において反学校的言説を克服する歴史研究の可能性を示したことは、史学史の上で興味深いものがある。日本では学術研究においてさえ、陳腐化した反学校的言説がまだ堂々とまかり通っている。本書を契機にして、こうした風潮がすみやかに克服されることを願いたい。

誤読や誤解は多々あるものと思うが、ロシア史の門外漢であることに免じて、ご寛恕を乞いたい。

① Cf. Boris Noguès et Philippe Savoie,《Marie-Madeleine Compère (1946-2007): Historienne érudite et pionière de l'éducation》, *Histoire de l'éducation*, no 124, oct.-déc. 2009, pp.8-9.

（A5判　四三五＋八三頁　二〇一〇年一二月　名古屋大学出版会　九四五〇円）

（龍谷大学法学部教授）